



日本 名著赏析



何志勇 张卫娣 编著

世界图书出版公司

I313.06/6

2007

日本名著赏析

何志勇 张卫娣 编著

世界图书出版公司

上海·西安·北京·广州

图书在版编目 (CIP) 数据

日本名著赏析 / 何志勇, 张卫娣编著. —上海:
上海世界图书出版公司, 2007.9

ISBN 978-7-5062-8882-8

I. 日… II. ①何… ②张… III. 文学欣赏—日本
IV. I313.06

中国版本图书馆CIP数据核字 (2007) 第099570号

日本名著赏析

何志勇 张卫娣 编著

上海世界图书出版公司出版发行
上海市尚文路185号B楼
(公司电话: 021-63783016转发行科)
邮政编码 200010

常熟市大宏印刷有限公司印刷
如有印刷装订质量问题, 请与印刷厂联系
(质检科电话: 0512-52621873)
各地新华书店经销

开本: 850 × 1168 1/32 印张: 8 字数: 200 000
2007年9月第1版 2007年9月第1次印刷
ISBN 978-7-5062-8882-8/H · 742
定价: 12.80元

<http://www.wpesh.com.cn>

前 言

在从事日语教学的实践中，有许多同学对我说他们不喜欢日本的文学，每一次我都微笑着对他们说，你们不是不喜欢，而是还不了解它。于是，我开始着手这本书的写作，期望他们借此喜欢日本文学，期望更多的当代大学生了解日本文学。

本书由30篇日本小说名著构成。每一篇中包括[梗概节选][注释][小说大意][赏析重点][作者简介]5个部分。

[梗概节选]

内容全部出自小川義男编著的『あらすじで読む日本の名著』一书，原书的梗概为全文梗概，为了更直接体现出小说的精髓之处，本书只是截取了梗概中最精彩，最能体现小说特点的部分。为了阅读的方便，在一些重点单词和难读单词上标注了假名。

[注释]

该部分为针对[梗概节选]中的文章所作。其中既有生僻单词的解释，也有关于文化背景的注释，力求读者能够更精到地把握小说的原意与深层次内涵。

[小说大意]

该部分由中文写就，整体介绍小说的基本内容，读者可以在此中找到节选文在整篇小说中的位置，以便加深理解。

[赏析重点]

编者在这里做了较大的发挥，囊括了作品成书的过程、作品与作家的关系、作品的评价以及关于作品的各种争论等等，力求展现作品的方方面面。如果其中能有一点儿引起读者的兴趣从而喜欢上日本文学的地方，那恰恰是编者的本意。

[作者简介]

该部分对作者的生平作了简明扼要的介绍，列出了作者不同时期的代表作品，不仅可以使读者了解所选文章在作家整个创作过程中的位置，同时也为读者进一步了解该作家提供了不少其他作品，从而达到该书抛砖引玉的作用。

本书适用于大学一、二年级与日语初中级水平的读者，旨在传达日本文学的妙处，让更多爱好日语的学习者了解和喜欢日本文学。故而，在节选文部分使用现代日语写就的小说梗概，一方面便于阅读与理解，有助于更好地实现本书的编写目的；另一方面避免了日本近代小说半文半白的文体，适合于日语初中级水平的读者，而且也更符合现代日语教育的要求，有利于读者通过节选的文章提高日语能力。

书中误漏之处，敬请各位学界前辈、同行以及广大读者斧正。

编者

2007年春

目 次

うきぐも 浮雲	1
こんじきやしや 金色夜叉	8
こじゅうのとう 五重塔	17
たけくらべ	25
ふとん 蒲団	34
たかせぶね 高瀬舟	42
ひがんすぎまで 彼岸過迄	50
ぎゅうにく ほれいしょ 牛肉と馬鈴薯	58
すみだ川 ^{がわ}	65
友情	73
ほうきょうにん 奉教人の死	82
やぶ 藪の中	91
う 生まれいづる ^{なや} 悩み	103
れもん 檸檬	111

かにこうせん 蟹工船	119
ぎん が てつどう 銀河鉄道の夜	127
かぜ た 風立ちぬ	135
ゆきくに 雪国	143
そうぼう 蒼氓	150
まん じろうひょうりゅうき ジョン万次郎漂流記	159
ろ ぼう 路傍の石	168
てん ゆうがお 天の夕顔	176
めおと ぜんざい 夫婦善哉	185
り りょう 李陵	193
にんげんしっかく 人間失格	201
しおさい 潮騒	209
てんびょう いちか 天平の甕	218
こ と 古都	224
黒い雨	232
はなおかせいしゅう 華岡青洲の妻	242

梗概节选

ろきぐも

浮雲（抜粋）

ふたばていしめい
二葉亭四迷

孫兵衛の長女、お勢はやんちゃ娘^①であったが、父親の望みで小学校へ、母親の好みで清元の稽古に通っていた。飲み込み^②も早く、学問、遊芸ともに出来がよいので、母親はだれ彼なしに^③娘自慢をした。

お勢は小学校を卒業すると私塾に入るが、わがままな性格のためにその生活になじめず、退塾して家へ戻ってきた。このころから、文三の心は落ち着かなくなっていく。

同じ屋根の下に暮らす文三とお勢は、ある月夜の晩、偶然二人きりの機会を持つ。

何気なくにっこりと笑い、仰向いて、月に見とれる風をするお勢の横顔を文三は盗むように眺めた。眼鼻口の美しさに加え、月の光を受けて少し蒼味を帯びた瓜実顔^④に、ほつれかかったいたずら髪^⑤が二筋三筋、風にそよいで頬のあたり動くさまは、ぞっとするほど凄味があった。しばらく文三が見とれていると、その横顔は次第にこちらを向き、パツチリとした涼しい目と目が合った。

「お勢さん」…

ちょうどそのとき格子戸こうしどの開く音にさえぎられ、文三はびつくりしてお勢と顔を見合わせ転げるように部屋を出た。

文三は某省ほうしよくへ奉職してからすでに二年近くがたった。少し蓄えもできたので、年取った母親を東京に迎えて、一家を成したい旨むねを知らせると、母親は大喜びし、妻をもらうことを勧め、どうせもらうならば親戚のこの子がよかろうと、写真まで添えてきた。文三がこのことをお政まさに話したが、叔父夫婦はお勢と文三と一緒にさせようと考えている様子である。

そんな矢先、文三は突然、論旨免職ゆしめんしよくとなった。やっとの思いでお政にその事実を言い出すと、まずは落胆らくたんし、すぐに友人の本田さんはどうだったのかと聞いた。

本田とは本田昇のぼるといい、文三より二年前に某省に入った才子さいしで、才覚さいかくがあるが、よく知恵才覚を鼻にかける^⑥。しかし、愛嬌あいきょうに富んでいて、きわめて世辞せじのうまい人間であった。日曜日にはご機嫌きげんうかがいと称して課長の私邸していまで訪ね、囲碁いごの相手もすれば私用ししようも足す。そんな如才じょさいのなさ^⑦から、本田は職を失わずにすんだのである。

本田は大丈夫だったと聞いたお政は、いやみの文句を並べ立て、本田の如才じょさいのなさをほめ、文三の不器用ぶきようさに癩癩かんしやくを起こすのであった。

下宿げしやくが目と鼻の先^⑧のせいかな、本田はしばしば文三のどこ

ろへ遊びに来た。特にお勢が戻ってきてからは三日にあげず遊びに来る。だいたいはお政相手に無駄口むだぐちを叩たたか、花合わせなどして寿司などをとらせる。お勢のことを美人だ、漢学も英学えいがくもできるとほめちぎるので、お政はおおいに気をよくするのであった。

注 釋

- ① やんちゃ娘：任性调皮的女孩，这里指阿势很天真、可爱。
- ② 飲み込み飲み込みのこ：理解，领会。
- ③ だれ彼なしに：不论是谁，不论和谁。
- ④ 瓜実顔うりざねがお：瓜子脸。
- ⑤ ほつれかかったいたずら髪：指散开的随风飘舞的几绺头发。
- ⑥ 鼻にかける：自大、自夸。
- ⑦ 如才じよさいのなさ：谙于世故、办事周到。
- ⑧ 目と鼻の先：就在眼前，近在咫尺。

小説大意

出生在静岡县的内海文三从小聪明好学，15岁时由于父亲过世，被迫寄宿在叔父孙兵卫家。婶母阿政是个非常精明的势利小人，家中的大事小情都由她一人操持，虽然文三非常尊重婶母，但还是经常受到婶母的厌恶。文三通过自己的努力考上了可以寄宿的大学，文三的刻苦学习换来了优异的成绩，受到

学校老师们的赞扬。期满学成后，文三又回到了叔父家，在找工作的半年时间里一直忍受着婶母的白眼。不久，文三在机关里觅得了一份工作，生活开始走上正轨。

文三稳定的工作使功利的婶母阿政开始转变对他的态度，同时，文三爱上了叔父与婶母的女儿阿势。天生丽质的阿势是阿政的掌上明珠，虽然接受了明治初期新时代的教育，看上去聪明伶俐、学艺兼优，实际上是一个很浅薄的女孩。文三在一个美丽的月夜与阿势单独相处时，深深被她的美丽所吸引并爱上了她，但文三一直不敢表白自己的心情。

两年后，阿政打算将自己的女儿嫁给老实稳定的文三，但就在这时，机关实行行政改革，平时不善于溜须拍马、巴结上司的文三被免了职。这使阿政大失所望，转而将女儿的终身寄托在文三的同事本田升上。本田是一个老于世故、蝇营狗苟的卑鄙小人，在改革中，他不但没有被免职，反而官升一级，当上了科长。阿政对文三的态度又回到了从前，开始时阿势还为文三辩护几句，但不久阿势就与本田升走到了一起。

本田升与阿政母女的交往日渐频繁，他还示意文三如果愿意，自己可以向上级疏通一下恢复文三的官职，但却遭到了文三的拒绝。文三已经无法再住在这个家中，但为了自己所爱的人不被本田这种只知道向上级献媚求宠的庸俗之辈所伤害，决定找阿势好好地谈一次话，然后坚决离开这个家。

赏析重点

《浮云》发表于1887年，它既是小说家二叶亭四迷的处女作，同时也是日本近代文学史上第一部杰出的长篇小说，其

现实主义手法与“言文一致”^①的文体对日本近代文学的创作与发展产生了巨大的影响，成为日本近代小说的先驱。

小说《浮云》写作于日本明治维新后、日本刚刚走上新兴资本主义道路的时期，它以现实主义的手法真实地描写出新旧思想的碰撞与矛盾。表面上看，小说的主人公是代表资本主义新思想的内海文三，但实质上，小说的核心人物是游离于内海文三与本田升之间的女主人公阿势。内海文三鄙视虚伪的人际关系，憎恶靠阿谀奉承的“厚黑”手段在官场上获得位与利益的行为，代表新兴资本主义健康向上、欲以自己的真才实学实现理想抱负的一代有志青年，这也是作者四迷想要歌颂的人物。相反，本田升则是八面玲珑的官场高手，貌似具有新思想，实为彻头彻尾的旧思想的卫道士。但作者并没有将小说描写成赞美文三、否定本田的爱憎分明的说教，深受俄国文学影响的四迷熟练运用俄国文学中现实主义的手法，准确写实地描写了当时社会的真实状况。小说《浮云》虽然历时三载完成了三部，但仍然没有最终完成。根据四迷的写作预想，本田在玩弄阿势后抛弃了她，文三在自身的绝望与爱人的不幸中最终精神崩溃。这种悲剧性的结尾具有深刻的现实性，印证了小说现实主义的写作手法。

女主人公阿势是小说的核心人物，同时也是小说人物关系中的一面镜子。小说细腻地描写了介于文三与本田之间的阿势的心理，她那种没有主见、易受他人思想影响的性格使读者在她的身上既能找到文三、又能找到本田的成像。同时，阿势的性格特点正代表了日本青年男女的精神倾向。在这里，四迷又一次运用现实主义的手法将当时处于新旧思想交替、心中没

有坚定信念而动摇不定的青年一代展现在读者面前。矢崎嵯峨分析道：“那个叫做田园势子的女性是小说的主人公。像她这样天真单纯、因周围的人而能轻易改变自己的性格正是日本人的性格。换言之，她的行动不是‘自动’而是‘他动’。因此，如果受到好的影响，她便愈好，相反则愈坏。小说《浮云》正是将阿势作为日本人的代表来描写的。”

作者二叶亭四迷应该属于内海文三的一类人，但是小说预见的悲剧性结尾是否可以说明四迷也在旧思想瓦解、新思想尚未成熟的社会变革期，彷徨而不知如何作出选择呢？四迷一边在批判旧思想，一边也对新思想没有足够的信心。阿势受到本田的影响，变得善变、虚荣而且浅薄。尽管文三充分认识到了这一点，但仍然抑制不住自己对阿势的爱。文三既感到深爱阿势是一种羞耻，同时又向往得到爱情。这种矛盾的心理构成了文三最后精神崩溃的根源，也是作者四迷面对社会不知所措的写照。

注释

- ①言文一致：指使用日常生活中的口语来写文章，追求内容与表现的一致。“言文一致体”的形成对近代日本文学的实践产生了积极而深远的影响，使日本现实主义、自然主义等文学理念得以实现并促进其发展。类似于中国的“白话文运动”。

作者简介

二叶亭四迷（1864～1909），小说家、翻译家。原名长谷川辰之助，二叶亭四迷为笔名，意为“你给我死掉算了”。这

个带有自嘲味道的笔名反映了他对社会现实的不满与愤慨。

二叶亭四迷在明治维新“开化革新”的社会变革中成长起来，从小接受汉学教育，深受中国儒家思想的影响，把为人正直、“俯仰无愧于天地”当作自己的座右铭。1881年考入东京外国语学校俄文科学习俄语。学习期间，二叶亭四迷大量阅读了19世纪俄国优秀作家的文学作品，接触到俄国革命民主主义思想，对他的人生观与文艺观的形成产生了积极的影响。

1886年，二叶亭四迷发表第一篇文学评论《小说总论》，针对当时日本文坛占主导地位的娱乐文学与单纯描写现实的创作方法提出不同的看法，主张作为一种艺术形式的小说应该是直接表现和宣传真理的手段，在创作方法上应通过现象描写现实中的本质，在日本首先倡导现实主义的创作方法。翌年，二叶亭四迷发表处女作《浮云》，以此实践自己的文学观，虽然小说最终没有完成，但仍在社会上引起了强烈的反响，奠定了四迷在日本文学界的地位。此后，他认为文学不是大丈夫的终身事业而停止文学创作，直到1906年才发表第二部长篇小说《面影》。1907年发表了最后一部小说《平凡》。另外，他还用现代口语翻译了屠格涅夫的《幽会》、《邂逅》等小说。

二叶亭四迷一生所追求的现实主义手法与“言文一致”的文体给日本近代文学的发展以极大的影响，其人被誉为日本近代文学的先驱者。1908年，二叶亭四迷赴俄国彼得堡任《朝日新闻》特派记者，工作期间不幸染上肺病，翌年病死于回国的途中。

こんじぎやしや

金色夜叉 (抜粋)

 おざきこうよう
 尾崎紅葉

両親を亡くし、身よりのない間貫一は、十五歳のとき、
 亡き父を恩人と慕う、鳴沢隆三に引き取られる。

貫一は鳴沢家の娘の宮を一途に愛し、宮も貫一を心憎か
 らず思っていた。鳴沢夫妻は、貫一が優秀で品行方正である
 ことから、学士の称をとらせ、鳴沢家の婿にしようと考えて
 いた。

しかし宮は、友人のカルタ会で銀行家の御曹司^{おんぞうし}①富山唯
 継^{つぐ}に見初められ^{みそ}②、貫一から心が離れていく。隆三は貫一に
 ヨーロッパ留学を勧め、「おまえは私の跡継ぎに違いない
 が、宮は嫁にやることにしてくれ」と頼む。

しかし、あきらめきれない貫一は、熱海^{あたみ}に行っている宮
 を追い、海岸で宮への思いを伝える。しかし、宮の気持ちは
 変らない。

「一月十七日、宮さん、よく覚えておおき。来年の今月
 今夜^{こんや}は、貫一は何処^{どこ}でこの月を見るのだから！再来年の今月今
 夜、十年後の今月今夜、一生を通して僕は今月今夜を忘れ

ん、忘れるものか、死んでも僕は忘れんよ！」と貫一は叫び、宮の前から姿を消し、行方をくらませた。

四年後、貫一は鱒淵直行のもとで金貸しとなっていた。しかし、宮への思いは変らないままで、せめてあのとき、今ある金があったならと借金を取り立てながら思うのであった。

…

宮の夫・唯継は出歩くことが多くなったが、宮はとがめなかった。そしてますます、貫一への思いを深くする。宮は思い悩んで、とうとう貫一への手紙をしたためた。

貫一は宮からの手紙を受け取り、一字ももらさずに読んだ。しかし、その後も、宮から手紙が何通も送られてきたが、そのたびに燃やしていた。なにを今さらと怒り狂って燃やし、焼かないときは引き裂いたこともあった。

しかし、宮からの手紙が十通にもなると、さすがに憤りは弱まり、悔い悲しんでいる宮のことが忘れられなくなった。とはいえ、許すわけでも、懐かしむわけでもない貫一であった。

* * * * *

ある日、貫一が千葉駅前ちばの休憩所きゅうけいじよにいと、聞くともなく男女二人の会話が耳に入ってきた。男は鱒淵の家を焼いた老女ろうじよの息子あくらまさゆき、飽浦雅之すずであり、女はそのいいなずけ^③の鈴であった。雅之は、自分の犯した罪と母の犯した罪から鈴と別

れようとしていたのである。それを聞いていた貫一は、あらためて自分と宮のことを思うのだった。

それから数日後、貫一のもとに宮がやってきた。

「なんの用ようがあつてきたのか」と罵倒ばとうする貫一に、宮はただ謝あやまるばかりである。

「六年前の一月十七日、あの時を覚えているか」

「…」

「さあどうか」

「私は忘れはしません」

「うむ。あのときの貫一こころもの心持こころもちを今日おまえが思い知るのだ」

「堪忍かんにんしてください」

思いあまつた^④宮は、貫一に殺してほしいとまですがりついた^⑤。

宮と言い争まじっているとき、満枝みつえが訪ねてきた。満枝にも会いたくない貫一は、宮を置き去りにして、家を出た。宮は悄然ぜんぜんとして帰るしかなかった。

いったんは外に出た貫一は、どうしても話があるという満枝と会うため、家に戻ることになる。満枝は貫一に自分の思いをぶつけるが、貫一はすげない^⑥言葉を繰り返すばかりであった。

その夜、貫一は、満枝と宮が争まじい、宮が満枝を短刀たんとうで刺したあと、貫一に許しを求めながら、喉を刺して、断崖だんがいから